

ドイツの保育施設における価値教育に関する研究 —バイエルン州幼児教育計画 (BEP) を観点として—

Die Forschung über Werteerziehung in Kindertageseinrichtungen in Deutschland
— unter dem Gesichtspunkt „Des Bayerischen Bildungs- und Erziehungsplans für Kinder
in Tageseinrichtungen bis zur Einschulung“ —

船 越 美 穂

Miho FUNAKOSHI

学校教育ユニット

(令和元年9月30日受付, 令和元年12月12日受理)

I. 問題の所在と研究の目的

ドイツでは初等中等教育段階の日本の道徳教育に該当する価値教育 (Wertebildung/Werteerziehung) は, 宗教科の中で行われてきた。ドイツの学校教育における価値・道徳のあり方については, ドイツ基本法 (1949 年) が根拠となっている。ドイツ基本法は「神と人類の前での責任の自覚」(前文) によって制定され, 宗教教育に関しては以下の条項によって規定されている。

「宗教の授業は非宗教的学校を除き, 公立学校において正規の授業科目である。」(ドイツ基本法第7条第3項)

ドイツ基本法のキリスト教的性格については, 「過酷なナチズム体験を潜り抜けたドイツ人たちの手で復権された, キリスト教倫理という理念が力強く流れ込んでいる」(遠藤 2009) という解釈がなされている¹。

しかし 1980 年代から急速に進展した価値観の転換や多様化, 移民や難民の背景を持つ住民の増加, そして 1990 年代に社会問題化した外国人への差別や暴力を背景として, 連邦 16 州では宗教科の代わりに「倫理科」などの代替科目を設けるなどの取り組みが行われてきた (福田 1998)。これまで初等中等教育段階における代替科目のカ

リキュラムの特徴については, バイエルン州の「倫理科」, ブランデンブルク州の「生活形成・倫理・宗教」, ノルトライン＝ヴェストファーレン州の「実践哲学科」についてすでに先行研究で明らかになっている (福田 1998, 新井 2007, 武藤 2007, 伊藤 2008, 濱谷 2016)²。

ドイツの保育施設³においては, 2004 年に, 青少年大臣及び文化大臣が共同で各州に向けて通達した「幼児教育のための各州の共通大綱」(Gemeinsamer Rahmen der Länder für die frühe Bildung in Kindertageseinrichtungen) に以下の通り, 教育領域として「個人的及び社会性の発達, 価値教育ないし宗教教育」が明記された。

「個人的及び社会性の発達, 価値教育ないし宗教教育: 子どもの個人としての発達の促進にとって, 認識とモチベーション, 身体発達と健康の促進と同様に, 人格の強化が必要である。社会の責任ある一員になるために, 子どもは社会的コンピテンシーと自分の方向を選ぶときに助けになり得る知識を必要とする。価値観と規範への取り組みと, それらの受容, 及び宗教的な問いのテーマ化も, 価値観の教育の一部となっている。」⁴

共通大綱の中で価値教育の必要性が明記されたことに応じて, 連邦 16 州では幼児教育カリキュ

ラムの中に価値教育を位置付けた。しかしその内実はバイエルン州のように価値教育の教育領域を独自に設けるケースから、価値教育を包括的に捉えている連邦州まであって一様ではない(Hildebrandt, F. & Pressing, C. 2017)⁵。しかし共通して言えることは、ドイツでは「価値教育は保育施設が担う教育使命」であるということである⁶。

ドイツの保育施設における価値教育は、初等中等段階とは違って、教科の中で学習されるのではなく、ホリスティックな保育方法(ganzheitliche Förderung)⁷によって、子ども達の日常の遊びや様々な活動を通して行われる。従って、ドイツの保育施設における価値教育のあり方について独自に取り上げて検証する必要がある。しかし、ドイツの保育施設における「道徳教育」については、ベルリン市の旧「ベルリン教育プログラム」の教育目標と教育領域を紹介することで、特徴を明らかにすることを試みた研究が一編あるにとどまっているのが現状である(吉田, 相賀 2012)⁸。

平成 29 年に改定された「幼稚園教育要領」, 「保育所保育指針」, 「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」では, 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の一つとして「道徳性・規範意識の芽生え」が明記された。この改定を受けて, 日本の幼児教育がどの方向に向かっていくのかが問われている。ドイツの保育施設における価値教育に関する研究は, 日本の幼児教育の方向性を探る上でも一つの手がかりになると考える。

そこで本稿では, 筆者のドイツの保育施設における価値教育に関する研究の第一歩として, 価値教育領域を独自に設けているバイエルン州の幼児教育計画を分析することを通して, 保育施設における価値教育の特徴についてその内実を明らかにすると共に, 日本の幼児教育への示唆を提言したい。

Ⅱ. バイエルン州幼児教育計画(BEP)における価値教育

バイエルン州幼児教育計画(Der Bayerische Bildungs- und Erziehungsplan für Kinder in Tageseinrichtungen bis zur Einschulung. 以下, 原語から BEP と略)⁹は, 2001 年にバイエルン州労働, 社会秩序, 家庭, 女性省から委託された IFP (Staatsinstitut für Frühpädagogik: バイエルン州立乳幼児教育研究所)によって作成された, バイエルン州の乳幼児期の保育施設のための教育カリキュラムである。2003 年から 2004 年にかけ

て暫定版が完成し, バイエルン州全土の 104 の施設で試行・フィードバックが行われ, 2006 年に最終版が出版された。その後も改訂が加えられ, 2018 年に 9 版を重ねている。

BEP の第 2 部「就学前の子ども達の陶冶と訓育」の第 7 章「テーマ別教育領域－価値を指向し, 責任感を持って行動する子ども達」の第 1 節が教育領域「価値指向と宗教性」(Wertorientierung und Religiosität)である。

本稿では, 教育領域「価値指向と宗教性」の基本的考え, 陶冶と訓育目標, 保育実践例等の内容を紹介し, 分析を行うことを通して, バイエルン州の保育施設における価値教育の特徴に迫っていくことにする。

1. 基本的な考え

BEP では教育領域の名称は「価値指向と宗教性」であるが, 実際の説明においては「倫理教育と宗教教育」(Ethische und religiöse Bildung und Erziehung)という表現を使用している。本稿では, BEP の内容を論じる際には, 「倫理教育と宗教教育」あるいは, 教育領域「価値指向と宗教性」という表現を使用するが, 論文の文脈上, BEP を越えて普遍的な意味合いが強い場合は, 「価値教育」という用語を使用することとする。

BEP によると, 倫理教育と宗教教育はバイエルン州憲法第 107 条第 1 項及び第 2 項に基づいて実施される¹⁰。州憲法では次の様に規定されている。

第 107 条

- (1) 信仰と良心の自由は保障される。
- (2) 妨げられない宗教的行為は国家の保護下に置かれる。

また, バイエルン州憲法第 131 条第 2 項では教育目標が定められている。

第 131 条

- (2) 最上位の教育目標は神に対する畏敬の念, 宗教的信条と人間の尊厳の尊重, 克己, 責任感と喜んで責任を引き受けること, 親切心, あらゆる真理, 善, 美に対する感受性を持つこと, 自然と環境に対する責任の自覚を持つことである。

ここで留意すべきは, BEP が追求している価値教育は, 「倫理教育と宗教教育が分かち難く一体をなす」形で行われることである¹¹。バイエル

ン州憲法に示されている教育目標、「神に対する畏敬の念」と、それに続く倫理的な価値項目の「宗教的信条と人間の尊厳の尊重、克己、責任感、親切心、あらゆる真理、善、美に対する感受性、自然と環境に対する責任の自覚」は、まさに一体となって展開されることが、後述する BEP の実践例からも明らかである。

さらに、倫理教育と宗教教育はドイツ社会の価値観の変化や多様性に応じた形で展開している点も重要な特徴である。BEP では子ども達が生きる宗教をめぐる社会環境について次のように述べている。

「積極的信教の自由及び消極的信教の自由の両立、すなわち、ある宗教共同体への所属を自由に決定し、宗教性を実践すると共に、（いかなる国教や宗教的団体などによって—筆者による）宗教的に感化を受けることから保護されていること、さらに住民の異文化的構成が増加している状況は、子ども達が宗教的所属と宗教活動の多様性、及び信仰を持たない人々によって特徴付けられる社会環境の中で成長する結果となる。」¹²

信仰や宗教の多様性といった環境の中で、いかに倫理教育と宗教教育を一体的に実践することができるかが問われている。

以上の様に、変化するドイツ社会の中で、BEP では倫理教育と宗教教育が果たせることとして、以下の観点をあげている¹³。

- 子どもによって意味深く、有益に経験される基本的な意味と価値体系の強化。
- 価値の基本理解力の形成に際して援助を行うこと：もはや測定や計量、計数ができない事柄との豊かな関連の中で、自ら理解し、自分の位置を学ぶこと。
- 危機、破壊、人生における移行と関わる能力を強化すること。
- 情緒性、動機づけ、及び社会性の発達において、子ども達を導くこと。
- 動機づけ、意味づけ、意味を明らかにすることへの問いを取り上げること。
- 複雑で、賛嘆に値する、しかし脅かされ、威嚇的な世界において勝手がわかるために、手引きを与えること。
- 子どもを自尊心と自己決定のために支援すること。

BEP が掲げている前述の観点を見ると、価値教育の役割が、複雑な社会の中で、子ども達が生きていくために必要な資質と能力の獲得であることが明らかである。

しかもその際、特徴的なのは、子ども達の問いを中心として実践が展開していくことである。BEP によれば、子どものすべての問いに対して、特に日常の宗教的な経験から生じる事柄に対して、尊重して、敬意を持って根気よく応じることが大切である¹⁴。子どもは自らの問いを豊かさとして解釈され、励まされ、支援されることで肯定的な経験をし、その結果、問いと答えの発見の喜びを持ち続けることができる¹⁵。この子どもの「問い」を重視する点が、BEP の価値教育の特徴であると捉えられる。問いと答えの探求によって、倫理教育と宗教教育は、子どもが自分独自の世界と人間の見方を広げることのできる基盤を提供すると考えられている。

BEP における価値教育は、変化し続けるドイツ社会の中で生きていくために必要な価値観と能力の習得に重点が置かれている。その際、重視されていることは、子ども達自身がモチベーションを持って、意味への問いを追求することなのである。

2. 陶冶と訓育の目標

BEP では教育領域「価値指向と宗教性」の陶冶と訓育目標を以下の通り示している¹⁶。

①身近にある宗教的なこと、及び様々な宗教と関われること

- 宗教、宗教的なこと、信仰の目の前に見出される形と徹底的に取り組んで、違いに気づき、自分の宗教的世界観的アイデンティティを意識すること。
- 様々な宗教、その宗教的なことと信仰に偏見を持たないで出会うこと。
- キリスト教的ヨーロッパ文化の主要な要素を知るとともに、他の文化圏を視野に入れること。
- 自分と自分の生活圏内の他の人々にとっての宗教、宗教的なこと、信仰の価値と重要性についての基本理解力を習得すること。

②自分の行動における様々な価値を意識し、判断の拠り所を発見すること

- 何が大切で、何を断念できるのか、何が幸せを作り、反対に何が怒りを呼び、傷つけるのかについて明らかにすることを習得する。

■ 弱さ、過ち、同様に許しと改心の文化が人生に属しているという経験をする事。

■ 自己の価値と他者の価値、及び環境の価値の間の調和的關係を発達させ、この関連で共感と感情移入力を奮い起こすことができる。

■ 特定の決定状況に関して、様々な行動の可能性があるということに対する基本理解力を発達させる。

■ 様々な宗教を持つ人、及び特定の価値秩序に結びつくお話の登場人物を知る。

■ 保育施設における日常生活の形成のために、共同責任を担う。

■ 対立に耐えて、決着をつけることを学び、進んで共同の解決を見つけ、寛容さを訓練し、自らの過ちを認めようとする。

■ 討議決定にとって有利になるように、暴力的な口論を行うことを放棄することを学ぶ。

■ 失敗したことに新たに切り掛かって、困難な人生の状況と関わる力を発達させること。

■ どの人もかけがえのない、特別な存在として受け止め、敬意と寛容を向けること。

■ 自身への排除や差別に対抗し、他者の場合には助けることができること。

■ 違いが危険をはらんだものではなく、価値あるものとして受け止めること。

■ 自分、及び他者の弱さ、限界、過失との付き合い方を学ぶこと。

■ 他人の行動、アニメーション、消費行動によって決定するのではなく、自分自身で決定することを学ぶ。

③自身の意味への問いを言葉で表現して、答えを確かめることができること

■ 人生を自明なものとして受け入れるのではなく、賜物として体験すること。

■ 感嘆、感謝、願いの基本的態度を発達させ、そのための表現形式を発見し発達させる。

■ 生命ないし世界現象における純粹に自然科学的な見方（原因と結果の関連）と、どこから、どこへ、どうやってとその意味を問う、むしろこの現象の背後に見える展望との間の違いを認識すること。

■ 自分たちにとって理解できない、または十分でない、または自分の意見と矛盾している説明に甘んじるのではなく、さらなる問いと答えを探す自信を発達させる。

■ 他者とオープンな問いについて建設的な意見交換をし、研究共同体を作る（互いに耳を傾け

て、他者に意見を述べさせて、自分の意見を形成して、他者の論証に理解を示し、自分の方法を見つける）。

■ 意味への問いの答えを自分の人生に関連づける。

④人生の意味をもたらすホリスティックな経験に敏感であること

■ 人生を構成し秩序づけることを助ける儀式に親しむこと。

■ 庇護感、共同体、静けさ、集中、視点の転換、視野の拡大の経験を仲介する宗教的空間の作用に親しむこと。

■ 宗教的祭りを体験し、聖書の話、また他の宗教的文書、物語、聖人伝、典礼の実施を知り、自分の人生との関連を発見すること。

■ 世界文化の知恵の物語、及び宗教的造形芸術と表現芸術の様々な形式の象徴性を、それらの中に含まれている、自分自身と、自分の人生及び自分の人生形成へのヒントを見つけながら、知覚する。

教育領域「価値指向と宗教性」の陶冶と訓育目標は、4つの目標からなっており、各目標の中に様々な小目標が包含されていることが理解できる。それらは、宗教、規範、民主主義的な価値、多様性、消費行動、環境教育、人生の意味など、倫理教育と宗教教育の目標が一体的に包含されていることが特徴である。

3. 保育実践のための手引きと活動例

BEPによると倫理教育と宗教教育は、他の教育領域と等しく価値を持っており、保育施設における教育活動において確固とした位置を占めている。しかし、保育施設の設置体、在籍している子ども達の家、及び保育者の宗教によって、その実践は様々である。

(1) 他の教育領域との横のつながり

保育施設における価値教育は、ホリスティックな保育方法によって体験される。従って、BEPでは倫理教育と宗教教育は、他の教育領域と緊密な関連を持ちながら実践される。しかし倫理教育と宗教教育の特色を保持することが必要で、他の教育領域の中に溶け込んでしまうことはない。倫理教育と宗教教育に特に関連が深い教育領域、コンピテンシー、及び教育方法は、以下の通りである¹⁷。

■ 抵抗力（レジリエンス）、子ども達の移行と教育履歴の持続：危機、破壊、人生における移行との付き合いの能力を強化すること。

■ 様々な文化的背景を持つ子ども達－異文化間教育：他の文化に開放的であること、他の文化圏出身の子ども達の宗教を含めた宗教間教育。

■ 情緒性、社会性、葛藤：社会的に責任ある行動にとって重要な価値観を持つこと、建設的な対立解決のための戦略、意味をもたらす経験すること。

■ 言語とリテラシー：例えば、聖書の物語。

■ 情報とコミュニケーション技術、メディア：消費行動と宣伝。

■ 美学、芸術、文化：例えば、教会の訪問、教会芸術を知ること。

■ 音楽：例えば、宗教音楽、教会のオルガン。

■ 環境：生態系への責任ある行動にとって重要な価値観を持つこと。

■ 教育的出来事への子ども達の関与（参画）：人間の尊厳と人権の尊重、共通の価値を討議決定すること、規則。

■ 子ども達と哲学すること：子ども達と倫理的、宗教的、さらに他の問いについて哲学的な会話をすること。哲学することは、神学することをも含む。

以上の通り、倫理教育と宗教教育は、他の教育領域との関連の中で、様々な場面で成立することが理解できる。とりわけ印象的なのは、価値教育を子どもの基本的コンピテンシーである抵抗力（レジリエンス）、及び子ども達の移行の問題と結びつけている点である。日本の保育施設においても、家庭から園、園から小学校への円滑な接続、多様な家庭への個別支援が課題となっていることから、BEPの実践は示唆を与えてくれる。

さらに、BEPが提示する倫理教育と宗教教育は、子ども達が参画によって共同決定をする中で、民主主義的資質と能力を獲得すること、及び「子ども達と哲学する」ことに関連づけて、実践されることが特徴である。BEPの価値教育では、参画及び子ども達との哲学といった教育方法とプロセス自体に、極めて重要な意味が内包されているのである。

(2) 教育の指針

BEPでは倫理教育と宗教教育は、保育施設の様々な実情を顧慮するために以下のような原理で実践される¹⁸。

①基準点は目の前の子ども達のニーズと能力である

②倫理教育と宗教教育は様々な特徴を持って生起する

③倫理教育と宗教教育は討議決定されるべき領域として理解される

BEPによれば、倫理教育と宗教教育はあくまでも各園の実態に合った形で実践されるべきで、多様性が認められている。教育内容等についてはオープンにされて、保育者と親が協議するプロセスが重視されている。

また、BEPによると、倫理教育と宗教教育では適切な学習環境を構成しなければならない。例えば、関連した絵本や、子ども達の宗教を特徴付ける象徴を用意すること、静かな空間によって子ども達に静穏と集中を体験できるようにすることが推奨されている。特に重要なのは、キリスト教ヨーロッパ的、及び人道主義的な世界観と人間観が強調されると同時に、子ども達がもたらす他の文化的、宗教的背景にもオープンになって、これらに尊重して出会える雰囲気づくりである¹⁹。

その際、保育者の価値観と世界観、および宗教的信条は、子ども達にとって模範になると考えられている。また、子ども達が、価値観と信条は、様々な文脈の中でその都度、新たに理解されなければならないこと、そして、繰り返しその根拠を探ることを経験すると、彼らの道徳的判断力と精神的活動性は強くなると捉えられている²⁰。

BEPによると、保育施設では、子どもの宗教教育への参加に際して、親の権利を尊重した上で、施設ごとの独自の宗教的及び世界観的特色を実践しなければならない。つまり、BEPでは、親は保育施設における子ども達のための倫理宗教的な提供活動の決定の際のパートナーとして位置付けている²¹。さらに宗教教育のために、地域の専門機関との連携が挙げられている。例えば、教会、モスク、シナゴグ、寺院、及び様々な宗教の代表者（牧師やイマーム）との接触などである。

(3) 活動の事例

BEPでは、前述した陶冶と訓育の目標に即して、以下の通り、様々な活動例が紹介されている²²。

①身近にある宗教的なこと、及び様々な宗教と関われること

■ 家庭から「神聖な」事物を持ってくる（例えば、ロザリオ、仏陀像、イスラム教の数珠状の祈りの用具）。

■ 親、保育者、訪問客が自分の宗教について話をする。

■ 瞑想コーナーと祈りのコーナーの整備。

■ 保育施設のメンバーを代表する、宗教の象徴と取り組むこと（十字架、ダビデの星、半月）。

■ 「ギャラリー」宗教：子ども達は宗教や信仰の経験を絵画に描く、神の像をスケッチする（教育領域「美学、芸術、文化」との関連で）。

■ 身近な環境の宗教、信仰、宗教に関するものの足跡を探す。

■ 様々な宗教の代表者と、共同の願いの表現として、平和と正義の宗教間の祈りを行う。

■ 家庭内の祝い事での礼拝の写真（例えば、子ども達自身の洗礼）。

■ 保育施設の子ども達に代表される宗教によって、子ども達の目下の生活場面に合った祈りを行う（様々な文化的背景を持つ子ども達－異文化間教育との関連で）。

②自分の行動における様々な価値を意識して、判断の拠り所を発見すること

■ 子ども会議（教育的出来事への子ども達の関与《参画》との関連で）

■ 童話や物語のヒーロー、ヒロイン像（抵抗力《レジリエンス》との関連で）。

■ ジレンマのあるお話、つまり子ども達が決定状況において自分の様々な行動モデルを思い描くように導かれ、またそのように勇気付けられるオープンな結果となっているお話。

■ 子ども達による保育施設での役割担当（教育的出来事への子ども達の関与《参画》との関連で）。

■ 食と自然への意識的な関わり合い（教育領域「健康」、「環境」との関連で）。

■ 地球の他の場所での子ども達の生活状況。

■ 身近な生活環境での貧しい子ども達のための連帯の活動。

■ 感情移入トレーニング（他者の身になって考える能力を伸ばすためのトレーニング）。

■ 規則、フラストレーション耐性、仲直りの習得のためのゲーム。

■ 宗教の聖人、倫理道徳的信条、教祖の行為への取り組み。

③自身の意味への問いを言葉で表現して、答えを確かめることができること

■ 子ども達と哲学すること。

■ 会話のルール（練習（教育的出来事への子ども達の関与《参画》との関連で））。

■ 質問の時間：一日の中で生じた問いがテーマ化されるように定められた時間。

■ 自然界における生命の生成と消滅（教育領域「環境」との関連で）。

■ 宗教の創造のお話：オープンな物語（子ども達は語られたお話を、自分の空想力でさらに先へ続ける）、または死をテーマとする絵本。

④人生の意味をもたらすホリスティックな経験に敏感であること

■ 教会、モスク、シナゴグ、寺院への訪問。

■ 瞑想（教育領域「健康」との関連で）。

■ 曼荼羅を描くこと。

■ 自分の宗教、及び他の宗教の行事を知ること、行事カレンダーを共同制作すること。

■ 意識的に日々の始まりと締めくくりを行うこと、祈り。

■ 互いの幸福を願って祝福の祝いを行う。

■ 神は人生の同伴者で、守護者で、希望の寄贈者として書かれている宗教の聖なる文書からのお話。

■ 子ども達の切実な人生経験の機会に、小さな（典礼の）祝いをする（例えば、保育施設への入園）。

■ 深い情緒的体験ができる絵画の鑑賞（教育領域「美学、芸術、文化」との関連で）。

(4) 聖書の物語

BEPでは、活動例の後に、聖書からの物語、及びテーマ「死」との関わりについて言及している。聖書については歴史や出来事などの知識を教えることが中心ではなく、子ども自身が大切な人生経験に物語の中で出会うことが趣旨である²³。つまり、子ども達が物語られたお話の主人公に自己同一化する中で、人生にとって重要な経験をして、それによって豊かになることが目指されている。BEPでは聖書の物語の中で実現される人生経験を次のように示している²⁴。

■ 聖書の物語は、いかに人間が新天地へと出発し、危機的な状況でも信頼を失わないで、困難な道に掛かり合う勇気を獲得したかについて伝えている。

■ 聖書の多くの物語では、いずれの人間も神の

被造物として無比の方法で、色々な天分と能力を備えていることが表現されている。

■ 聖書の物語では、人は自分の不履行に責任を持つこと、新たなことを始める勇気を信仰によって獲得することを伝えている。

■ 人は未来が生きるに値するという希望のイメージを必要とする。キリスト教の信仰は平和、正義、そしてすべての生物が生きる権利を持つ、守られるべき神の被造物として描かれている。

■ 聖書の物語の中で明らかにされた人生の価値とは責務である。そこでは自己愛から隣人愛への転換が追体験できる。

以上の聖書の物語に関する言述から、倫理教育と宗教教育が一体的に行われるという BEP の価値教育のあり方を改めて理解することができる。前述した、子ども達の抵抗力（レジリエンス）、つまり危機、破壊、人生における移行との付き合いの能力を強化することも、聖書の物語の登場人物に同一視する中で、追体験することができる。

BEP では、「物語をする」ということは、すでにその題材選択の際に、子ども達のどの能力を強化すべきかについて考慮することだと述べている²⁵。また、物語の言葉の意味について、以下のように言及している。

「人は自分を助けて先へ進ませる言葉を自ら言うことはできない。それは人に言葉としてかけられるものである。この意味で聖書の物語は呼びかけの言葉であって、子ども達は登場人物と同一視する中でその言葉を享受している。」²⁶

BEP によると、保育者に求められるのは、物語る時に緊張を緩和する雰囲気を作ることである。また、物語る時間と場所を意識的に選択して、子ども達が明らかな構造と確かな習慣を持つことも重要であるとしている。さらに、物語の際に、共同で解決策を探し、自分の感じ方や考えを伝え合うことも重要である。物語に関する絵を描いたり、共同で音楽表現にすることも推奨されている²⁷。

BEP における物語に関する言述は、聖書にのみ該当するのではなく、子ども達との絵本や童話の体験にも通底していると受け止めることができる。「人は自分を助けて先へ進ませる言葉を自ら言うことはできない。それは人に言葉としてかけられるものである」という BEP における物語観によって、子ども達との物語体験を改めて検討

してみる意味があると考ええる。

(5) 喪失のテーマ化

BEP では、テーマ「死」は、子ども達の人生に関する「基本的問い」にとって重要な位置を占めている。それは人生の構成要素として決定的に重要であると捉えられている²⁸。教育的な日常にはこのテーマとの建設的な関わりを媒介する機会が豊富にあると言う。BEP では、実践例として「自然の中で死んだ動物を発見すること」、「かつての幼稚園園長の墓地への訪問」を紹介している。墓地への訪問の実践例には、次の様な説明が付されている。

「子ども達が将来の喪失の出来事の克服に有益な影響をもたらせるテーマに全くオープンに関わり、このことに関して話をするができることを明らかにしている。子ども達はテーマと根本的に取り組んで、死は全く自然なことであって、生の一部であることを経験する」²⁹

BEP では、喪失のテーマ化は、子ども達にとってとても重要であると捉えている。なぜなら、「死」との意識的な取り組みを通して、子ども達が困難な状況をどのように体験しているかについて、信頼感を持って、オープンに話ができる雰囲気生まれるからである³⁰。子ども達はこのことによって「悲しみ、不安、あるいは憤りの感情をも表現し、『魂の苦悩を語る』ことを学ぶ」³¹と言う。それは他の困難な状況においても応用することのできる、特別に肯定的な克服のための戦略であると捉えられている。

BEP によると、保育者は子ども達の否定的な感情を無視するのではなく、それらが自然に消滅していくことを待たねばならない。否定的な感情は子ども達が他者とそのことについて話すことができ、その人によって理解されたと感じる中で、むしろ解体していくと捉えられている。BEP では、本物の危機へと発展する前に、子どものまだ発達上、十分には表現できない感情に耳を傾けることを求めている³²。

日本の保育施設においても、子ども達は日常的に生き物の生と死に接する機会が多い。また、身近な人を喪失する経験をする子ども達もいる。BEP の喪失についての考え方は、日本の実践の進め方への示唆として受け止めることができよう。

(6) 教会の体験

BEP では、教育領域「価値指向と宗教性」は、実践事例「教会への訪問」で締めくくられている。教会への訪問には、以下のような観点が付されている³³。

■ 重要なのは子ども達を教会と特別な方法で結びつける、牧師、教会の世話係、及び信徒達と出会って、質問を行うことである。

■ 教会についての様々な質問は「教会で人は何をするのか」「いつも過ごしている空間と何が違うのか」「教会のどの場所が好きか」などの新たな問いを導く。

■ 五感で教会の空間を知覚する。「特別な匂いがするのか」「どんな通路があるのか」「どんな音がするのか」「石壁に触ってみる」「柱を抱きしめて測定してみる」など。

■ 教会の様々な場所（例えば、洗礼台、祭壇、説教壇など）は特別な物語を伝える。

■ 教会での礼拝に関わることを自分でもやってみる。祭壇に花を飾る、ろうそくに点火する、聖書のお話を説教壇から聞く、パイプオルガンの響きに合わせて歌う、祈りを唱える、その際、私たちにとって大切な他の人々のことを考える、祝福を受ける。

BEP の価値教育ではホリスティックな経験が重視されていることが特徴である。ホリスティックな価値教育に関わる経験は、宗教や教会に直接結びつかなくとも、子ども達は日常の保育の中で様々な形で経験している。

バイエルン州の保育施設に行くと、どの園にも癒しや静けさの空間が用意されている。その部屋には大抵、ソファやクッションが置かれてあり、照明は薄暗く、天井にミラーボールが設置されている場合もある。アロマ系のルームフレグランスの香りが漂っている場合や、ヒーリング系のBGMが流れている場合もある。子どもはこの部屋に來たい時に來て、静けさの中でゆったりと寝転がって、くつろいで過ごすことができる。ここでは、子どもが静かに、ゆっくりと過ごすことのできる空間と時間が保障されている。休息すること、一人で静かに過ごすこと自体に教育的価値を置いているのである。

また、ドイツの保育施設では提供活動として、子どもヨーガが行われることも珍しくない。筆者が見学をした実践では、子ども達はヨーガのポーズをゆっくりと行うとともに、休息のポーズでは静かに仰向けに寝転んで、目を閉じて、自分の呼吸を感じていた。ヨーガが終了すると、子ども達

は互いに優しくマッサージをして、心地よさを体感していた。最後に、子ども達一人ずつ、渦巻き状の板の表面を、指で静かになぞって、感想を言う。保育者は子どもからのリクエストによって、ヨーガで使用する金属製の鐘を、子どもの足元、お腹の上、背中の上などで鳴らす。子どもは鐘がもたらす身体への振動を静かに感じて、最後の振動が途絶えるのを待ってから、ヨーガの部屋を退室していった。ヨーガの時間の中で、印象的だったのは、保育者が終始、子ども達に「もっとゆっくり」、「この瞬間を味わって」と声掛けを行っていたことである³⁴。

ドイツの保育施設の癒しの部屋や、ヨーガの活動もまた、価値教育に関連した取り組みであると捉えられる。子ども達は、活発に行動するだけでなく、静かに自分の内面と対話することをも必要としていることが、これらの実践で理解できる。筆者は、価値教育の基盤には、子ども達の心の安定がなければならず、それを成立させるのが安らぎや静けさの体験であると考ええる。BEP の価値教育を、ホリスティックな経験という観点において、さらに検証する意味があると考ええる。

Ⅲ. 考察と今後の課題

BEP の掲げる価値教育は、ドイツ基本法、及びバイエルン州憲法に基づき、倫理教育と宗教教育が分かち難く一体をなす形で行われている。また、キリスト教的ヨーロッパの伝統的関係において成立している基本権と人権を義務付けている³⁵。内容的には、宗教的なことに関すること、自分の行動の判断の拠る所を意識すること、意味への問いを表現して答えを探すこと、ホリスティックな経験に敏感であることに分類される。その内容は他の教育領域と関連しながら、日常の様々な場面で展開する可能性を持っている。教育方法は、子ども達の保育施設における出来事への参画を前提としており、子ども達自身が問いを発見し、哲学することによって、人生における基本的問いに取り組むことが重視されている。同時に、多様化している社会の変化に対応するために、様々な宗教や文化に対する尊重と開放性を促進する工夫がなされている。

日本の幼児期の価値教育への示唆としては、子ども達からの問いを意識的に取り上げること、子ども達の参画を通して、民主主義的な資質と能力の育成に関連づけること、日常生活の中でのホリスティックな経験、例えば、静けさや癒しの経験を重視することであると考ええる。また、子ども達

との物語体験を再検討することも必要であろう。

ドイツの保育施設の多文化化が進展する中、BEPの掲げる価値教育がいかに実践されているのか、とりわけ「子ども達と哲学する」こと、子ども達の参画、及びホリスティックな経験がどのように実践されているのか、保育者は価値教育をどの様に受け止めているのかについて、保育施設におけるフィールドワークで明らかにすることが今後の研究課題である。また、ドイツの連邦16州の幼児教育カリキュラムにおける価値教育の比較分析を行うことも課題である。

付記 本研究はJSPS 科研費19K02644の助成を受けたものである。本論文は、その一部を日本保育学会第72回大会にて発表した。

註

¹ 遠藤孝夫 (2009)『戦後ドイツ社会の再建とキリスト教倫理の復権—ヴュルテンベルク・バーデン州憲法 (1946 年) を事例に—』岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第8号, 14 頁。

² 福田弘 (1998)「価値・道徳・宗教の教育」天野正弘, 結城忠, 別府昭郎『ドイツの教育』東信堂, 160-166 頁。

新井浅浩 (2007)「ブランデンブルク州における『生活形成・倫理・宗教』科」武藤孝典・新井浅浩編著『ヨーロッパの学校における市民的社会性教育の発展—フランス・ドイツ・イギリス—』東信堂, 199-217 頁。

武藤孝典 (2007)「ドイツの学校において」武藤孝典・新井浅浩編著『ヨーロッパの学校における市民的社会性教育の発展—フランス・ドイツ・イギリス—』東信堂, 162-174 頁。

伊藤敏子 (2008)『価値教育の諸相—ドイツ語圏における動向から—』三重大学教育学部研究紀要第59巻教育科学, 177-186 頁。

濱谷佳奈 (2016)『ドイツにおける倫理・哲学科による道徳教育カリキュラム改革—コンピテンシー・モデルへの転換に注目して—』カリキュラム研究第25号, 15-26 頁。

³ ドイツの施設型保育施設は、①3歳未満児対象の保育所 (Kinderkrippe), ②3歳～就学前の幼児対象の幼稚園 (Kindergarten), ③小学生対象の学童保育 (Hort) に区分でき

る。現在、ドイツでは様々な形態の施設を総称して、Kindertageseinrichtungen, 又は Kindertagesstätte (Kita) という名称で呼ぶ。しかし、州によって様ではない。例えば、バイエルン州ミュンヘン市では、生後9週間から12歳までの子ども達が在籍する施設、子ども達の家 (Haus für Kinder) がある。本稿ではドイツの就学前期の子ども達を保育する施設の総称として、保育施設という用語を使用する。また、日本の場合においても、幼稚園、保育所、認定こども園等を総称して、保育施設という表現を用いることとする。

⁴ Kultusminister Konferenz, Jugendministerkonferenz 2004: Gemeinsamer Rahmen der Länder für die frühe Bildung in Kindertageseinrichtungen.

⁵ Hildebrandt, F. & C, Pressing.(2017): Wertebildung in der Kita: Frühkindlicher Bildungsort mit vielen Zusatzaufgaben. Bertelsmann Stiftung(Hrsg.). Werte lernen und leben. Theorie und Praxis der Wertebildung in Deutschland. Gütersloh. S. 95.

⁶ Hildebrandt, F. & C, Pressing.(2017), S. 96.

⁷ ドイツでは、2004年に、青少年大臣及び文化大臣会議で可決制定された、「幼児教育のための各州の共通大綱」(Gemeinsamer Rahmen der Länder für die frühe Bildung in Kindertageseinrichtungen 2004 年)の中で、「保育施設の教育プログラムはホリスティックな援助の原理で形成される。教科別指導や学問分野への方向づけはなじまない」と明記された。OECE 保育白書 (Starting Strong II) によると、ホリスティックな援助とは、子どもを全体としての子ども、つまり、「身体、知性、情緒、創造性、歴史、社会的アイデンティティをもった子ども」として捉えて、向き合うという意味であると解釈されている。(OECD 編著, 星三和子他訳『OECD 保育白書 人生の始まりこそ力強く: 乳幼児期の教育とケア (ECEC) の国際比較』明石書店, 70 頁。)

⁸ 吉田武男, 相賀由美子 (2012)「ドイツの幼児全日施設における道徳教育に関する一考察—『ベルリン教育要領』を手がかりにして—」筑波大学教育学系論集36巻, 65-83 頁。筆者らは論文の中で、価値教育ではなく、道徳教育という用語を使用しているため、ここでは「道徳教育」と記載した。

⁹ Bayerisches Staatsministerium für Arbeit und Sozialordnung, Familie und Frauen & Staatsinstitut für Frühpädagogik(2018): Der Bayerische Bildungs- und Erziehungsplan

für Kinder in Tageseinrichtungen bis zur
Einschulung. Berlin: Cornelsen. (以下, BEP と略)

¹⁰ BEP, S. 161.

¹¹ BEP, S. 166.

¹² BEP, S. 161.

¹³ BEP, S. 162.

¹⁴ BEP, S. 162.

¹⁵ BEP, S. 162.

¹⁶ BEP, S. 162-164.

¹⁷ BEP, S. 165.

¹⁸ BEP, S. 165-166.

¹⁹ BEP, S. 167.

²⁰ BEP, S. 167.

²¹ BEP, S. 167.

²² BEP, S. 168-169.

²³ BEP, S. 169.

²⁴ BEP, S. 170

²⁵ BEP, S. 171.

²⁶ BEP, S. 171.

²⁷ BEP, S. 171.

²⁸ BEP, S. 171.

²⁹ BEP, S. 172.

³⁰ BEP, S. 172.

³¹ BEP, S. 172.

³² BEP, S. 172-173.

³³ BEP, S. 173-174.

³⁴ 船越美穂 (2018) 『ドイツにおける子ども達の
参画を促す保育者研修の実際と参加者の意識が意
味するもの』福岡教育大学紀要, 第 67 号第 4 分
冊, 107-119 頁。

³⁵ BEP, S. 166.